

私の保育……

まんとみちびっこレストラン

近藤千恵子

しのび寄る秋を感じながら、保育者は忍耐強くこどもたちの作品を「作品展」につなげる努力を続ける。ダンボールの動物材ができ、とび立ちそうなロケットが発射の時を待ち、「いっしょに作るコーナー」を用意し……。けれども作品展は、やはり、我が子の作品をさがそうとする見る側と、期待通り認めてもらえなかった事がちよっぴり不満の、見られる側にわかれがちで、行事を終わった保育者の心に、何か燃えかすのような不満を残したようであった。

今年、あえてこんな行事をやる必要はないと思っていたところへ、若い保育者たちから、びっくりするようなプランが提案された。「子どもたちって、みんなレストランごっこが大好きでしょう。あのレストランごっこを本物でやりましょうよ。『まんとみちびっこレストラン』で云うのはどうでしょう」

子どもたちに、此の計画を発表した時のわれるような反響。レストランのメニューは、ホットケーキ、オープンサンドイッチ、

のりもち、みつめ、紅茶、の五種類、一食二十円ときまった。子どもたちは、めいめいのクラスで話しあって、自分が「なにやさん」になるかをきめる。一方、職員室では、保育者たちもどの店の責任者になるかをきめるくじびきをして、私は「きつぷうりや」にきまった。

或る日、幼稚園中の子どもが遊戯室に集まり、「なにやさん」のプラカードを持った先生のまわりに集まって、メンバーの顔合わせをしてみると、三歳のクラスの先生がみつめやだったの、みつめやに三歳の子どもがたくさんいたり、四歳のクラスの先生がホットケーキやだったので、ホットケーキやには、ぞろぞろと四歳の子どもがくっついて行ってしまったり……。「あのねえ、もう一度考えてきめましょうよ。自分がなにやさんになりたいかよく考えてね。そうしてきめたら、最後までそのお店をやらないと、レストランはできないのよ」と説明する先生も口角泡をとばす。さて、わがきつぷうりのメンバーをみわたすと、三

歳、四歳、五歳、とりまぜて、あまりレストランには関心のないような子どもが十六人。(被害妄想かしら)「レストランが閉店する時まで頑張つてね」と祈るような気持ちになった。

子どもたちは、めいめい『なにやさん』のバッジを作って、ちびっこレストランの準備をする時は、それを胸につけてやって来る。始めにする仕事は、お客さんが、迷わずたくさん来るような看板を作る事である。よだれの流れそうなほかほかの看板を作った紅茶や、チビクロサンボもびっくりしそうなホットケーキやの看板、下町情緒のみつまめや、田舎風のおもちやの看板もできなかった。それなのに、きつぷやのまさひこ君は、「二十円なんて、このぶつかだかにやすすぎるよ」と云って右往左往するばかりで、「おまえも書けよな」と仲間には叱られたりしていた。次に、五種類の色画用紙で食券を作り、五箇の貯金箱を用意し、百円を十円に両替えする為のお皿も数箇作った。だんだんと準備が進んでくると、コックの帽子や、ウェイトレスの髪かざりを頭にのせた子どもたちが、満足そうに、足早やに歩いたりするのもおかしい。余力のある子どもは、灰皿や、テーブルを飾るこまかい作品を作る。子どもたちの発想は、保育者がびっくりする程に、次々と展開してゆくようであった。

いよいよレストラン開店。その興奮と、緊張とスリルは、本物

でなければ絶対あり得ないものだったろう。

入口近くに陣取ったきつぷうりばには、忽ち親子の長い列ができて、「はい、みつまめ」「紅茶ですか、はい」と云ったやりとりが始まった。

「あのね。ホットケーキ、なかなか焼けないから、きつぷ売るのはしばらく休んでください」「あらー」お客の列からためいきがもれる。

「みつまめはもう売切れです」と、みつまめやのウェイトレスがかげこんで来れば、お客さんもがっかり。

張切ってよく働いていたきつぷうりの子どもたちも「早く行かないと売切れちゃうよ」とそわそわしはじめた頃、「先生、かわりにやらせてくれますか」と、卒園した小学生の子どもたちがやって来て交代する事になった。「かねをだせ」と、製作コーナーで作ったピストルをつきつけて、強盗に来たのも卒園生だった。

次、に売切れの店が多くなって、ちびっこレストランは、予定通り正午に無事閉店を宣言した。

「ねえ、此の見本も食べていいでしょ」

「エエッ、じゃあ、ないしょね」

こうして、ちびっこレストランは、なんにも残さず、めでたく終了したのである。(まんとみ幼稚園)